

2022年1月2日（日）「失われることなき希望」

詩編 14 編

1 指揮者によって。ダビデの詩。

愚か者は心の中で言う、「神などいない」と。彼らは墮落し、忌むべきことをした。善を行う者はいない。

2 主は天から人の子らを見下ろし、神を求める悟りある者はいないかと探られる。

3 すべての者が神を離れ、ことごとく腐り果てた。善を行う者はいない。一人もいない。

4 悪事を働く者たちは誰もこのことを知らないのか。パンを食らうように私の民を食い尽くし、主を呼び求めようとはしない。

5 だが、彼らは恐れおののくことになる。神が正しき人の輪の中におられるから。

6 あなたがたが苦しむ人の望みを辱めようとしても、主が彼の逃れ場。

7 シオンからイスラエルに救いがもたらされるように。主が民の繁栄を回復されるとき、ヤコブは喜び躍り、イスラエルは喜びに包まれる。

【序論】

新年あけましておめでとうございます。世界がコロナ騒動に見舞われてから、丸2年が経ちました。混乱の中で歩み出す2022年ではありますが、私たちの思いがどうであれ、時は流れ歴史は動いていきます。教会としても今がどういう時代なのかを見極め、この世界に対して発信できることを考えてまいりましょう。休止状態にある教会活動も、一つひとつ動き出すことを願っています。

年始にはいつも詩編から説教をさせていただいておりますが、今日与えられた御言葉を通して、主がこの教会に、世界に、何を語っておられるかを考えていきたいと思えます。詩編 14 編は、苦難の中にあつたイスラエルの民の叫びです。タイトルに「**ダビデの詩**」とありますが、おそらくバビロン捕囚の直中で歌われた詩だと思われまふ。捕囚の期間はおよそ55年であつたと考えられていますが、これは一人の人間の人生の半分以上となる長さです。長期に亘って苦しみ続けた人々がいた。その中で唱えられた祈りがあつた。先行きの見えない時代にこそ読まれるべき詩編なのではないでしょうか。

## 【本論】

本編の内容は、53編とほとんど同じです。違う点があるとするならば、「神」について語られるとき、14編で「主」が用いられているところが、53編では「神」になっているケースが多い（53:3, 5, 7）ということです。14編で用いられている「主」の名は契約的な意味を持ちますので、詩人が特に「神とイスラエルの関係」に重きを置いて語っていることが分かるでしょう（「神」の場合は「全世界の神」を意識）。もう一点、14:5-6と53:6でそれぞれ語られている内容には、見てすぐに分かる違いがあります。

本論1. 神の民を苦しめる者

愚か者は心の中で言う、「神などいない」と。彼らは墮落し、忌むべきことをした。善を行う者はいない。主は天から人の子らを見下ろし、神を求める悟りある者はいないかと探られる。すべての者が神を離れ、ことごとく腐り果てた。善を行う者はいない。一人もいない。悪事を働く者たちは誰もこのことを知らないのか。パンを食らうように私の民を食い尽くし、主を呼び求めようとはしない。（14:1b-4）

この箇所を一読してみると、聖書全体からいくつかの関連聖句が思い浮かんできます。特に、ローマ3:10-12に共通点が多い。

次のように書いてあるとおりです。「正しい者はいない。一人もいない。」悟る者はいない。神を探し求める者はいない。皆迷い出て、誰も彼も無益な者になった。善を行う者はいない。ただの一人もいない。（ローマ3:10-12）

「一人もいない」という点が強調されています。詩人とパウロ、両者に共通している人間観は、人類全体の墮落です。彼らは、異邦人だけとか、誰か特定の人を指して言っているではありません。イスラエル人も同様、誰もが神に背いて生きている。この点において、選民的優位思想は崩れ去り、すべての人が神の御前に「有罪」という札をぶら下げて一列に並びます。

「神などいない」という、気になる表現も出てきます。いわゆる「無神論者」を指すと思われませんが、彼らがそのように言うところの本質は、むしろ神を見ないようにしている者の反抗的態度でしょう。神に対して意図的に心を閉ざし、良心に逆らって生きる。巨大な権力を手にした者は、たとえ聖書のことばが迫ってきたとしても、それに従うのではなく、むしろそれを利用して悪しきことのために用いる傾向があります。神よりも自分を上に置く。この世界を経済力によって思いのままに操る者は、自らを神格化して

いく。詩人が生きていた頃の時の権力者、バビロニア帝国の王も、そのような倒錯に陥っていました。ネブカデネザル王が発した言葉はこうです。

このことはすべてネブカドネツアル王に起こった。十二か月の後、王はバビロンの王宮の屋上を歩いていた。王は言った。「これこそ大いなるバビロンではないか。私はこれを、わが力ある権威をもって、わが権威の栄誉を示すために、王国の家として建てたのだ。」

(ダニエル4:25-27)

権力は一介の人間を「何者か」にしてしまう危険性を孕んでいます。彼が発する傲慢な言葉のすべてが神の耳に届けられた。その結果、王の身に起きたこと。

まだその言葉が王の口にあるうちに、天から声が出た。「ネブカドネツアル王よ、あなたに告げる。王国はあなたから取り去られた。あなたは人間の中から追放され、野の獣と共に住み、牛のように草を食べ、七つの時があなたの上を過ぎて行く。そしてついに、あなたはいと高き方が人間の王国を支配し、ご自分が欲する者にそれを与えるということを知るようになる。この言葉は、直ちにネブカドネツアルに成就した。彼は人間の中から追放され、牛のように草を食べ、その体は天の露に濡れ、ついに彼の髪は鷲の羽のように伸び、爪は鳥の爪のようになった。」(ダニエル4:28-30)

王冠を外せばただの人間。肩書き、持ち物、容姿、経歴…。挙げればきりがありませんが、人は裸で生まれてきたはずなのに、やがて多くの虚飾を身にまとうようになるのです。ネブカデネザル王の姿は、その意味で被造物にすぎない自分という存在を忘れた人間を代表していると言えるでしょう。

## 本論 2. 苦しむ人の望み

だが、彼らは恐れおののくことになる。神が正しき人の輪の中におられるから。あなたがたが苦しむ人の望みを辱めようとしても、主が彼の逃れ場。(14:5-6)

ここで心に浮かんでくる疑問は、先に「義人なし」「一人だになし」と言われていたのに、ここでは「正しき人」がいることになっている点です。読者は混乱を覚える。このことについては、聖書全体の文脈で理解していかななくてはならないでしょう。神の御前には確かに一人として正しい人はいない。しかし、そのような罪人が義とされる道を聖書は呈示している。それは、悔い改めという道、信仰という道です。へりくだって神の恵みに依り頼む者は赦され、その罪は永遠に思い出されることはありません。

もはや彼らは、隣人や兄弟の間で、「主を知れ」と言って教え合うことはない。小さな者から大きな者に至るまで、彼らは皆、私を知るからである——主の仰せ。私は彼らの過ちを赦し、もはや彼らの罪を思い起こすことはない。(エレミヤ 31:34)

このよう見ていくと、バビロン捕囚で苦しんでいる民の心に「悔い改め」があり、神との関係が回復してきていたことが読み取れてくるでしょう。迫害と抑圧の中であって、彼らが依り頼むことができたのは神のみであった。外国の地で過酷な労働を強いられる日々、逃れる術を失った彼らは、涙をもって神に呼びかけたのです。私たちもまた、どんな苦しみの中にあっても、呼びかけ、祈るべき方がいます。神は常に私たちの「**逃れ場**」であり給うからです。

私たちは、「コロナ期」という時代が長期戦になることを一応は想定しておく必要があるでしょう。ここ 10 年の間に価値観は激変し、社会も教会も考え方を変えていかなくては生き残れなくなると思われます。そのような時代の変遷に対応しながらも、私たちが失ってはいけないものがある。それは、神との正しい関係です。詩編 14 編に見る、捕囚の民のへりくだりと祈りを、私たちは忘れてはなりません。へりくだり、悔い改め、神との契約に留まり続けるのです。

### 本論 3. 贖いを待ち望む祈り

キリスト者には、どのような状況下にあっても失われることのない希望、最終的な贖いの約束があります。

**シオンからイスラエルに救いがもたらされるように。主が民の繁栄を回復されるとき、ヤコブは喜び躍り、イスラエルは喜びに包まれる。(14:7)**

この祈りは、基本的には捕囚からの解放を求める民の願いです。55 年という抑圧の日々は、当事者たちにとって永遠にも感じられたことでしょう。もし私が今から 55 年生きたとしたら、100 歳近くになってしまいます。捕囚経験者の中には、ついに祖国の土地を再び踏むことなく召された人々もいたはずですが、それでも彼らは祈り続けました。先行きの見えない現実の中にあっても、希望を捨てることはありませんでした。

彼らの希望は、ただ単に捕囚からの解放だけを求めるところにはなかったと思われまます。この 7 節の聖句に終末的な贖いのイメージが置かれているのを、読者は見落としてはなりません。旧約聖書の預言的な聖句には、近未来の贖いの向こう側に見据えられた終末的展望が同時に映されていることが多い。バビロン捕囚からの解放というのは、「贖いの型」であり、それはやがて主イエスによって実現される「罪からの解放」を指し示し、最終的には再臨の主によって実現される全世界の贖いを暗示している。

**捕囚からの解放 → 主イエスによる罪からの解放 → 再臨による全世界の贖い**

パウロが被造世界全体の贖いの展望をどう抱いていたかを見ておきましょう。

被造物は、神の子たちが現れるのを切に待ち望んでいます。被造物が虚無に服したのは、自分の意志によるのではなく、服従させた方によるのであり、そこには希望がありません。それは、被造物自身も滅びへの隷属から解放されて、神の子どもたちの栄光の自由に入るという希望です。実に、被造物全体が今に至るまで、共に呻き、共に産みの苦しみを味わっていることを、私たちは知っています。被造物だけでなく、霊の初穂を持っている私たちも、子にさせていただくこと、つまり、体の贖われることを、心の中で呻きながら待ち望んでいます。私たちは、この希望のうちに救われているのです。現に見ている希望は希望ではありません。現に見ているものを、誰がなお望むでしょうか。まだ見えないものを望んでいるのなら、私たちは忍耐して待ち望むのです。(ローマ 8:19-25)

#### 【結論】

私たち個人は、まことに小さな存在であるかもしれません。しかし、私たちが胸に抱いている希望は巨大なスケールであることを忘れないようにしたい。目の前の現実を追われる日々であります。私たちは常に世の終わりに必ず起こる、再臨の主による全世界の贖いを見据えて歩いていく必要があります。個人の小さな力では、世界の流れを止めることはなかなかできません。しかし、何者も私たちの祈りを止めることはできないのです。御言葉をしっかり心に蓄え、信仰告白を新たにし、明確な福音の理解を持って、力強く歩み続けたいと思います。

#### 【祈り】

歴史を導いておられる、天の父なる神様。この年も御言葉の糧をいただいてスタートできたことを感謝いたします。私たち個人は小さい存在ですが、この心に宿している方は偉大です。全宇宙の創造主を神として持っている幸いを噛み締めております。私たちの祈りに力を増し加えてください。そこに、まことの信仰が常に宿り、あなたの心を揺り動かすほどのものでありますように。私たちはこの世の流れの中で生きている者でありながら、国籍は天に持っています。その確信に突き動かされながら、神の国の前進のために心から労する一年を過ごすことができますように。この教会の足腰を強めてください。

【祝祷】

仰ぎ願わくは、  
高ぶる者の心を知り、その思いを砕き給う、父なる神の愛、  
人を罪の縄目より解放し、終わりの日の贖いを成し遂げ給う、主イエス・キリストの恵み、  
悔い改める者の祈りを聞き、苦難の中での逃げ場となり給う、聖霊の親しき交わりが、  
あなたがた一同の上に、限りなくあらんことを。